２０２２年度

湘南白百合学園中学校
入　学　試　験　問　題

国　　語

45分

受験番号		氏名	

〇受験番号・氏名は解答用紙にも書くこと。

＊答えは解答用紙に書きなさい。

一

次の――線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

① 長いコウカイから無事に帰る。
② 念願がかなって犬をカい始めた。
③ 庭にはオモに百合を植えている。
④ 飛行機のジョウム員になる。
⑤ サトウの原料はサトウキビである。
⑥ 周囲からの愛情により大切に育まれた。
⑦ 治安の良い国なので安心して旅行に行く。
⑧ 猫(ねこ)の額ほどの土地に家を建てる。
⑨ 薬が効いてだんだん熱が下がってきた。
⑩ 留守にするので戸じまりを確認する。

二

次の――線部には複数の訓読みがあります。例を参考にして、送りがなをそれぞれ答えなさい（送りがなは空らんの数に合わせること）。

例　その人と彼は全□関係がない。　答（　く　）
　　全□の責任を負うつもりだ。　答（　て　）

(1)
① 編み目が細□□ので気を付けて編み進める。
② 細□道路を通りぬけると海が広がっていた。

(2)
① 毎日を大切に生□ていくことを心にとめる。
② 生後六か月くらいに乳歯が生□はじめる。

三

次の文章は小学校六年生の会話です。みなみの発言の空らん①～④に合うものを後の選択肢から選び、それぞれ記号で答えなさい（記号の使用は一回のみ）。

しょうこ「中学生になったら、小学校の時よりも高度な学習をするらしいね」

ゆりこ　「そうなの？　例えば国語ではどんなことを学ぶのかしら」

しょうこ「私の姉は今度中学三年生だけど、一年生の時の教科書をこの前見せてもらったの。そうしたら、現代の物語文や説明文に交じって『竹取物語』があって…」

みなみ　「　①　」

ゆりこ　「そうよね、もっと難しい文章を読むのかと思っていたのに」

しょうこ「私もそう思ったの。それで姉に同じ質問をしてみたの。そうしたら、姉もそう思っていたって」

ゆりこ　「そうよね」

みなみ　「　②　」

しょうこ「でもね、姉は続けてこう言ったの。『自分が知っていたお話と同じだけど、知らないことばかりだった』」

ゆりこ　「えっ、同じでしょう？　かぐや姫は竹の中から発見されて、月の世界に帰っていくのでしょう？」

しょうこ「姉がね、『話の筋はもちろん同じ。だけど、求婚者たちのことを比べたり、かぐや姫が月から来た理由を考えたりしたことはなかった。それに昔の文章は知っていた内容より情報量が多くて複雑だったから、本当にびっくりした』って話していたわ」

みなみ　「　③　」

しょうこ「そういうこと。他にも色んな発見があるらしいよ」

ゆりこ　「昔の文章ってただ教えてもらうだけかと思っていたから、びっくり」

みなみ　「　④　」

【選択肢】

ア　やっぱり

イ　私は国語は苦手だけど、ちょっと楽しみになってきた気がする

ウ　ということは、私たちが知っていることはまだほんの一部ということなの？

エ　知ってる！　かぐや姫のお話でしょう？　それなら小学校の低学年の子でも知っているお話よね。わざわざ中学校の授業で習うなんて意味があるのかな

四

友人がわたしの家に初めて遊びに来ることになり、駅からの道順を教えてほしいと言われました。図を参考にして各文を適切な順に直し、順番を記号で答えなさい。

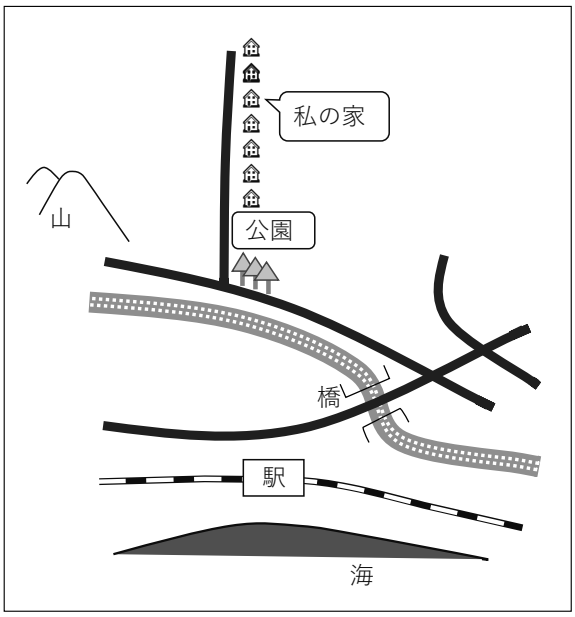
ア　大きな木が三本並んでいるところを曲がります。

イ　橋を渡（わた）り、最初の交差点を左に曲がります。

ウ　海とは反対側の駅の改札から出ます。

エ　右手に見える公園を通り過ぎて五番目が私の家です。

オ　川ぞいに山の方に向かってしばらく進みます。



五

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。（設問の都合上、本文を一部省略しています。）

《小学六年生の染岡朱理は、幼い容姿から「あかちゃん」とあだ名をつけられ、周囲の友人や大人から子ども扱いされることに悩んでいた。そんな中、クラスに転入してきた理緒が真剣に話を聞いてくれるので、もっと仲良くなりたいと感じていた。しかしある時、理緒の苦手な話題をふってしまったことで、二人は気まずい雰囲気になってしまう。朱理は日々の出来事やお気に入りの小説をもとに自分なりの「あかずきんちゃんのおはなし」を考えるのが好きで、次の文章は朱理が考えた「おはなし」の途中から始まっている。》

この世界は魔法にあふれている――それは、この世に存在するあらゆることは、つきつめてしまえばすべてが魔法であるということ。
毎朝、お日さまがのぼること、それは魔法です。
ニワトリが卵をうむこと、それは魔法です。
人と人が出会うこと、それは魔法です。
だれかを好きになること、それは魔法です。
テレビは、遠くの景色を映す魔法の道具です。
はさみは、ひとつのものをふたつに切り分ける魔法の道具です。
電話は、離れたところにいる人と心を通わせる、魔法の道具です。
時計は、見えないはずの〈時間〉を、目に見える形に変える、魔法の道具です。
絵をかくことは、世界をキャンバスの上に絵の具で閉じこめる魔法です。
料理を作ることは、食べものをおいしく変身させて、だれかを元気にする魔法です。
音楽をかなでることは、楽器をあやつり、すてきな音色で、聴く人の魂をゆさぶる魔法です。
勉強することは、〈未知〉という暗闇を照らし、世界を知識の光で満たす魔法です。
そう、①この世のすべては、魔法にほかならない。

それに気づくことこそが、魔法使いとしての第一歩。
だけど――。
「でも、わたし、だからってなにかができるわけじゃないよ。得意なことも、とくになにもないし。魔法があることを知っていても、使えなかったら意味ないじゃない」
あかずきんちゃんの言葉に、魔女はあきれたように眉を上げました。
「なーにを言っているんだい。なにかができるわけじゃない？　そんなはずないだろう。今、きみはその力を使っているよ。だれもが使える、それゆえにだれも魔法だと思わない、だけど、なによりも強い力を持つ偉大な魔法だ」
だれもが使える、だけどなによりも強い力を持つ偉大な魔法。
そう言われても、あかずきんちゃんにはさっぱり思い当たりません。
「わたし、そんなの使えないよ」
「ほら、また使った」
楽しそうに、魔女がそう言います。
あかずきんちゃんはすこしばかり考えて、たずねました。
「言葉？」
魔女は笑いました。
「そう。自分にしかとらえられない心を、目に見える〈文字〉や、耳に聞こえる〈声〉にして、相手に伝える力。そうやって、相手の心をふるわせ、ゆさぶり、動かす力」
ふっと視線を上げる魔女。
あかずきんちゃんもつられて空を見あげます。
風がふき、空からおどるように落ちてきた一枚の木の葉を、魔女の右手がとらえました。
あかずきんちゃんにそれを差しだして、魔女はしずかに言いました。
「言の葉の力だ」

魔女の手のひらにのった、一枚の木の葉。
それをじっと見て、あかずきんちゃんは言いました。
「なんて言ったら、いいんだろう」
「きみが思っていることを、そのまま言えばいいんだよ。上手に言おうとしなくていい。聞こえがいいようにかざる必要もない。心配しないで。ちゃんと伝わるよ」
魔女の言葉に、あかずきんちゃんは［　A　］と手を伸(の)ばします。
指先でふれた木の葉はやわらかく、軽く、だけどしっかりとそこにありました。

チャイムの音。わたしは心の森の中から、図書室にもどってくる。
ページに目をもどすと、こんなセリフが目に入った。
「あとは、きみが一歩踏(ふ)みだすだけだよ。だいじょうぶ。きっとうまくいく」
それは、物語の中で、*1ノゾミがリカに向けて言った言葉だけれど、わたしはそれを魔女からのはげましのように感じた。

放課後、わたしは理緒といっしょに帰りながら、考えていた。
言わなきゃいけないことはわかっている。だけど、それでわたしの気持ちがすべて伝わるのかどうかは、やっぱり自信がなかった。
そのまま言えばいい。かざる必要もない。魔女さんはそう言ったけれど。
しばらく、わたしたちは無言だった。さっきまでぽつぽつ話していたことのなかみも、よく覚えていない。右から左へどんどん流されて、どこかに消えてしまったようだ。なにも心に残らないような、うわべだけのやりとり。
ごめんね――それだけの言葉が、どうしても出ない。
なんだろう、こわい。
理緒がゆるしてくれない、とは思わない。
きっと理緒は、「いいよ。気にしないで」って言うだろう。

でも、それじゃだめなんだ。それじゃいやなんだ。むりして笑ってほしくないんだ。わたしがなにかいやな気持ちにさせちゃったなら、そう言ってほしい。

そうじゃなきゃ、ほんとうの友だちだなんて、言えない。

「ごめんね」

②わたしは顔を上げた。

理緒の言葉に、かすれた声に、顔を上げた。

「え……？」

理緒は気まずそうな顔をしていた。

「今朝からなんか、へんな空気にしちゃって、ほんとごめん」

「なに言ってるの。ごめんはわたしのほうだよ」

わたしは泣きそうになりながら言った。

「わたしがへんなこと聞いたから。わたしこそごめん。なんだろ、わたし、理緒ちゃんのこと、こまらせちゃったんだよね。こうなるなんて、ぜんぜん思ってなかった。ごめん」

理緒は首を横にふった。

「ううん、気にしないで。こんなことで、ごめんなんて言わせて、逆にごめんだよ」

笑ってそんなふうに言う。

だけど、やっぱりその笑いかたは、ほんとじゃない。

こまったような。むりしているような。かなしそうな。

苦しんでいるような。

そんな表情を見て、わたしはようやく気づく。

きっとわたし、理緒のこと、傷つけちゃったんだ。

「あのね、理緒ちゃん」

わたしは言った。祈(いの)るような気持ちで。

「わたしさ、いつも理緒ちゃんが話を聞いてくれるの、すごくうれしかったの」

不思議そうな顔をする理緒。わたしは続ける。

「ほら、わたし、みんなに子どもあつかいされてるっていうか、まあ子どもなんだけど、なんだか、みんなわたしの話なんて、真剣に聞いてくれなかったから。だから、理緒ちゃんがこの学校に来て、わたしといっしょにいてくれて、いっつもにこにこしながら、話聞いてくれるの、すごくうれしかったんだ」

理緒はだまっていた。じっとわたしの目を見て、なかなかうまくまとまらない言葉を、それでも待っていてくれた。

「だけど、気づいちゃったんだよね。わたし、自分の話ばっかりしてて、理緒ちゃんのこと、よく知らないって。わたしばっかりしゃべっちゃって、理緒ちゃんの気持ち、考えてなかったって。それ、よくないなって思ったの」

「そんなこと……」

理緒はつぶやくように言った。わたしは首をふる。

「そんなことじゃないの。大事なことなの」

わたしは［　B　］とこぶしをにぎった。つめが手のひらに食いこむ感触(かんしょく)。

③小さな痛み。

「わたし、理緒ちゃんとほんとの友だちになりたい。だから、理緒ちゃんのこと、もっと知りたい」

想いをのせて、わたしは言の葉を放った。

そうすることしかできなかった――ううん、ちがう。

そうすることができたって、思うべきなのかも。

ギター弾(ひ)きの魔女に教わった偉大な魔法。

言の葉の力に、わたしは自分の想いをたくしたんだ。

理緒はだまりこんだ。なにかを考えているようだった。

わたしは待った。

いつまでも待つつもりだった。
理緒の言の葉を。そこにたくされた、理緒自身の気持ちを。
しばらくして、理緒は［　C　］と、こんなことを言った。
「うちは、染岡さんがおしゃべりしているの、聞くのが好き。染岡さんがさ、楽しそうにしているの見ると、なんていうか、うちまで幸せな気持ちになるっていうか……」
アスファルトの地面に視線をさまよわせながら、理緒は言葉を探す。
「なんか、世の中ってたいへんなこと、いっぱいあるけど、染岡さんと話していると、なんだか、この世界もまだまだ捨てたもんじゃないって、そんなふうに思える」
そして、照れくさそうに理緒は言った。
「染岡さん、お日さまみたいだって思う。染岡さんがとなりにいてくれて、楽しそうに話しているだけで、うちにそうやって話しかけてくれるだけで、超（ちょう）ハッピーっていうか」
わたしは、胸のおくが「きゅうっ」てなるのを感じた。
こう、「きゅうっ」って。しめつけられるような。でも、それがうれしいような。
愛おしいような。
「ありがとう」
わたしが言うと、理緒はうなずいた。
「ううん、でも、そうだね。うちもたまには、自分のこと話すことにする。おもしろくないかもだけど、染岡さんが聞いてくれるなら」
「うん。いっぱい、おしゃべりしようね」
くすぐったそうに笑って、理緒はわたしに手のひらを見せた。
「ね、手」
わたしはその手に、そっと自分の手のひらを重ねる。
ふれあった理緒の手は冷たくて、指が長くて、表面がさらさらしていた。

そうやって手を合わせたまま、理緒はつぶやくように言った。

「あのね、染岡さんにだから言うけれど、うち、バドミントン、きらい。だから、染岡さんといるときは、その話、したくない」

その声には、ちょっぴり影が差していた。

だけど、その影を見せてくれたことが、今はうれしかった。

わたしはうなずいた。「わかった。じゃ、楽しい話をしようね」

（村上雅郁『りぼんちゃん』）

（注）＊1　ノゾミがリカに……朱理が図書館で読んでいた本の登場人物。

問一　［　A　］～［　C　］にあてはまる語句として最もふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A　ア　おずおず　イ　ぐいっ　ウ　ぽーん　エ　のろのろ

B　ア　さらり　イ　めきめき　ウ　ぎゅっ　エ　がつん

C　ア　ぺらぺら　イ　ぽつぽつ　ウ　ぐだぐだ　エ　ねちねち

問二　朱理が想像している話の世界から現実世界へと切り替わっている部分を探し、現実世界について書かれている部分のはじめの五字を書きぬきなさい。

問三　――線部①「この世のすべては、魔法にほかならない」とありますが、魔女が朱理に教えようとした魔法とは何ですか。文章中より三字で書きぬきなさい。

問四　――線部②「わたしは顔を上げた」とありますが、このときの朱理の気持ちとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　やっと自分から理緒に謝ることができ、気分が晴れてまっすぐ向き合うことができている。

イ　自分は謝ることが苦手だが、そのまま理緒に対して謝罪のことばを続ける覚悟を決めている。

ウ　自分が話し出す前に理緒が謝罪のことばを口にしたことが意外で驚いている。

エ　理緒がやっと謝ってくれたので、自分も理緒を許そうという気持ちになっている。

問五　次の文は、――線部③「小さな痛み」を感じたときの朱理の気持ちを説明したものです。空らんに入る言葉を、文章中の言葉を用いて答えなさい。

今まで〈　　十五字程度　　〉ことを後悔する気持ち。

問六　朱理が〜〜線部「偉大な魔法」を使ったことで、理緒はどのように変わりましたか。魔法が指す内容を明らかにしつつ、六十字以内で述べなさい。

六

次の文章は、ノンフィクション作家の筆者が、脳科学者である東京大学大学院総合文化研究科准教授の四本裕子さんにインタビューしたものである。よく読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。（設問の都合上、本文は一部省略があり、「図1」「図2」の語の追加と配置を変えています。）

脳科学はとても人気がある領域で、その分、多くの俗説が充分な検証もないまま、世に流布している。〈　中略　〉科学的であろうとすると、導き出せる結論も地味なことになりがちで、声も通りにくい。東京大学大学院総合文化研究科の四本裕子さんはそんな*1ジレンマの中、あくまで科学の側に立つ。小さなステップを踏みながら、我々が脳内でどんなふうに情報を処理し、統合していくのか、それらがどうやって知覚となり、意識となっていくのか、慎重かつ綿密に追い求めていく。実を言うと、四本さんの研究の「入口」は、日常生活の中にヒントがある場合が多く、たとえば「錯視」は格好の入門編だ。そして、研究の成果としても、将来、世界中の人たちに感謝される一大発明につながる（かもしれない）ものもある。決して、本人が言うような「地味」な話ばかりではないし、なによりも、日常への眼差しが科学の入口になるという部分には、興奮させられる。

〈　中略　〉

さて、脳にかかわる世間の関心は強く、さまざまなことが語られる。科学的な根拠がなかったり、あったとしても曲解、拡大解釈して、結果、誤った理解を広めてしまうことが絶えない。たとえば、二〇〇九年、OECD（経済協力開発機構）が公表して、有名になった「神経神話」〝Neuromyths〟には、「人間の脳は全体の一〇%しか使っていない」「右脳人間・左脳人間が存在する」「脳に重要なすべては三歳までに決定される」「男性の脳と女性の脳は違う」などが挙げられている。

脳の性差は、まさにこの「①神経神話」の代表的なもののようだ。四本さんは、そこにどう切り込むのか。

「間違った心理学で、男性がこう、女性がこうとか、世の中ではよく言われていますね。例えば、男女の脳の違いとして、男性の方が左右の脳の連携がよくないとか。これには、元になった論文がありまして、一九八二年に『サイエンス』誌で発表されています。男女それぞれ、*2脳梁の太さを測ったら、女性のほうが太かったと。でも、この論文のデータは男性九人、女性五人からしかとってないんです。それだけで、女性のほうが左右の脳の連絡がよくできているっていう結果にしている。そもそも信頼性がないし、その後、いろいろな研究者が再現

しようとしたものの、結局できていません。今さすがにこれを信じている脳科学者はあんまりいないんですよ」

現在の知見では、少なくとも形態上、男女の脳に違いはない、ということになっているそうだ。しかし、「男女の脳」「脳梁」といったキーワードで検索すると、驚くほどたくさんの結果がヒットして、「脳梁が太いから女性はおしゃべりで、感情的」みたいなことが平気で書いてある。

〈 小見出し省略 〉

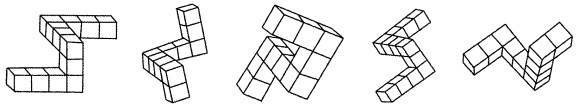
では、「脳の性差」を研究する四本さんは、「性差がない」と見越した上で研究を進めているのだろうか。

もちろん、「ない」ことを証明するのは難しいし、科学的な議論としては、検出できる違いがあるか、あるならどの程度か、ということになるのだろうが、それでも、見通しがどの方向なのかというのは知りたい。

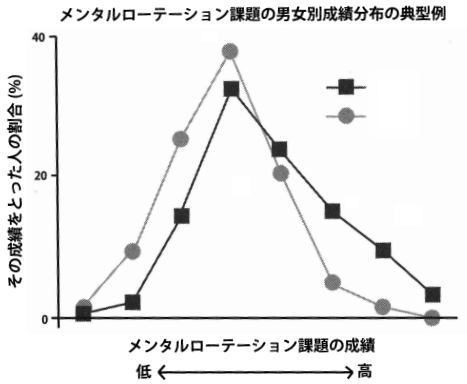
「私、別に男女の脳に差がないとは全然思ってなくて、絶対あると思っているんです。でも、じゃあ、それがどんな差なんだろうっていうときに、気をつけてもらいたいことがあります。たとえば、これを見てください（図1）。メンタルローテーション課題というんですけど、立体図形を頭の中でクリクリッと回して、一致するものを探す課題ですね。これって、世の中にある諸々の課題の中で一番、男女差が出やすいっていわれてます」

これはぼくも聞いたことがある。②「女性は地図が読めない」という理由付けに使われていた。それ自体、神話の香りがする説だが、そこはスルーして、四本さんの説明をさらに聞く。

「じゃあ、この課題での男女差ってどのくらいだろうっていうときに、横軸に点数をとって、縦軸にその点数をとった人の人数をプロットした[*3]ヒストグラムを作ります（図2）。右にいくほど成績がいい人で、左にいくほど成績が悪い人で、平均あたりに一番人数が多いという形になった時、男性と女性のプロットを比べると、女性はちょっとだけ全体的に左にずれている。これは統計的にはめちゃめちゃ有意なんです。確実に男女差がある。でも、有意だというのと、大きな差があるかというのは別で、男女のヒストグラムがこれだけ重なって、男女の平均の差よりも、個人差の方が大きいよねってくらいのものですよね。一番、はっきり差がでるものでもこれくらいですから」



メンタルローテーション課題の例。画像提供：四本裕子　**図1**



最も差が出るテストでも、男女の平均の差よりも個人差のほうが明らかに大きい。画像提供：四本裕子　**図2**

すごく大事なのは、集団Ａと集団Ｂの間に差があると分かった時、それが統計的に「有意」であったとしても、それだけで、集団Ａの構成員はこうで、集団Ｂの構成員はこうだ、とは決めつけられないということだ。集団間にある分布の違いを明らかにすることと、構成員の個々の特性を明らかにすることは全く違うことなのに、しばしば混同される。

さて、それでは、四本さんが、以上のような前提に立って、また、③手持ちの武器である高性能な[*4]ｆＭＲＩ装置を使って分かってきたことは？

「先にも言いましたが、最近の男女差研究って、スキャンして見たら、この部分が男女で形態的に違うみたいなことはもうないんです。では、何が違うのかというと、脳内部でのつながりの強さなんです。私たちの研究では、脳の中の場所を八四カ所に取り分けて、そのつながりの強さの違いを、八四 × 八四の組み合わせで考えてます」

これは四本さんが[*5]自家薬籠中の物とするｆＭＲＩの[*6]面目躍如たる研究だ。脳の形態も血流もすべて考慮して、八四×八四の組み合わせ（正確には二で割って三五〇〇くらいの組み合わせ）を総当り的に見ている。様々な部位が、別の部位とどれくらい強くつながっているかを丹念に確かめ、その結合の強さで色分けすると、ちょっと訳のわからない模様が浮き上がってくる。

「八四×八四の組み合わせの表を男女別に作って、女性と男性の差を計算してあるんです。八四カ所、それぞれ脳の場所の名前がついています。それで、皆さん、関心があるのは、こういった組み合わせで何が言えるだろうってことだと思うんですけど、それはわからないです。ただ、こういったもののパターン認識は、最近の機械学習が得意なので、パターンの違いを学習したＡＩに分類させると、まあまあの精度で男女を見分けることができる、くらいのことは言えるんです。でも、これって、たぶん男女じゃなくても、これくらいの差は出るんですよね。例えば、二〇代の人と三〇代の人、というふうに比べてもやっぱり差はでると思います」

違いはある。パターンの違いで見分けることもできる。

男女という分け方だけでなく、年齢差やほかの分け方でも、ネットワークの結合パターンの違いは見えてくる。

今わかっているのは、それくらいだ。

ここから新たな神話を引き出すというような話ではないらしい。

やがて、こういったネットワークの結合パターンが男女の認知や行動などの違いとどう関係しているのか分かる日が来るかもしれないが、それも、おそらくは「メンタルローテーション課題」の場合と同じで、［　Ａ　］としての分布の違いは言えても、［　Ｂ　］の差を

はっきりと語るものにはならないだろう。

それでも！　相変わらず、神経神話は量産され続けている。四本さんは、同じくｆＭＲＩを使って、男女の脳のネットワークに統計的な差を見つけたとする論文が、その後、どのように伝わっていったか追跡した論文（ややこしい！）を見せてくれた。

「これ、二〇一四年の『プロスワン』誌に科学コミュニケーションの研究者たちが書いたものです。まず、注目した論文というのが『ＰＮＡＳ（米国科学アカデミー紀要）』に出たｆＭＲＩを使った脳研究で、脳の中のネットワークが、女性は半球〝間〟のつながりがやや強くて、男性は半球〝内〟のつながりが強い傾向があるというものでした。その後、論文から*7プレスリリースになり、ニュースにとりあげられてブログの記事になり、ニュースのコメント欄、*8ヤフコメみたいなところにいくにつれて、本来は「結合パターンに統計的な差が見つかった」って話なのに、「女性はマルチタスクにすぐれていて、男性は難しい課題に集中することができる。だから女性は家にいて家事をやるのが得意で、男性は外で仕事をするのがいいということがわかったと報告された」になってしまうと。いかに細心の技術と知識を使って、二群の差をあらわそうとして、単純化できないような差を見つけたとしても、そんなものは社会に必要とされていないんだなあと思い知らされます」

科学的であろうとすると、（　④　）のを自制して、地味になる。にもかかわらず、こと脳神経については、自分の研究がすぐに「神話」に組み込まれてしまう可能性と常に隣り合わせだ。では、どう伝えればいい？

四本さん自身もジレンマを抱えているわけだが、何時間もお話をうかがって、今、この原稿を書いているぼくにしてみても、やはり大いなるプレッシャーを感じざるを得ない。

さて、ここまで読んでくださったみなさん。

ぼくが描いた四本さんの研究は、地味だけど充分に知的好奇心を刺激しましたか？　それとも、「はっきりした結論を出さない」がゆえに、もどかしく不親切なものだったでしょうか。

前者なら、いいなあと、心から願う。

（川端裕人『科学の最前線を切りひらく！』）

（注）　＊1　ジレンマ……二つの対立する事柄の板ばさみになること。

＊2　脳梁……左右の大脳半球をつなぐ、せんいの太い束。

＊３　ヒストグラム……縦軸（たてじく）に度数、横軸に階級をとった統計グラフの一種。
＊４　ｆＭＲＩ……磁気を利用して画像を映し、無害に脳活動を調べる方法。
＊５　自家薬籠……自分の使いたいときに自由に使える物や技術。
＊６　面目躍如……得意な分野で実力が十分発揮されて、目をひくさま。
＊７　プレスリリース…報道機関に向けた、情報の提供・告知・発表のこと。
＊８　ヤフコメ……「Ｙａｈｏｏ！ニュース」におけるコメント投稿サービスの略称（りゃくしょう）。

問一　――線部①「神経神話」について、筆者はどのようなものとして説明していますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　男性の脳と女性の脳のしくみがちがうことは、昔から言い伝えられている真実であるということ。
イ　ＯＥＣＤが公表して、有名になったもので、科学的な根拠に基づく、神がかった真実であるということ。
ウ　脳の性差は間違いだが、男女それぞれ、脳梁の太さを測ったら、女性のほうが太かったということが正しいことである。
エ　脳のしくみについて、科学的な根拠がなく拡大解釈しているのに、世間での関心が高いため、真実だと受け取ること。

問二　――線部②「『女性は地図が読めない』という理由付けに使われていた」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　立体図形が見える角度によって形が変わることで、別の形を想像してしまう発想の豊かさが女性にはあるということ。

イ　立体図形の読み取りが女性は男性より劣（おと）るという結果を、女性は平面図形である地図の読み取り能力が低いということにこじつけているということ。

ウ　立体図形を別の角度から見る力は地図を読む力と関係がないのに、女性には立体図形を頭の中で展開できないと決めつけているということ。

エ　立体図形の読み取りと平面図形の読み取りは密接な関係があり、メンタルローテーションの結果はすぐに男女の差へとつながるということ。

問三　図2のメンタルローテーション課題の男女別成績分布の典型例のグラフで用いられている■と●はどちらが男性でどちらが女性ですか。正しい組み合わせを次から選び、記号で答えなさい。

ア　■　男性　　●　女性

イ　■　女性　　●　男性

問四　――線部③「手持ちの武器である高性能なｆＭＲＩ装置を使って分かってきたこと」とありますが、実験について説明した次の文の（　①　）・（　②　）に入る言葉を、文章中よりそれぞれ五字～十字で探し、書きぬきなさい。

脳の形態や血流を考慮し、（　①　）の組み合わせの中で様々な部位が別の部位とどれくらい強くつながっているかを色分けし、ＡＩに認識させると、（　②　）の違いぐらいしか分からないということ。

問五 [A] ・ [B] に入る組み合わせとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　A　集団　　B　個人
イ　A　個人　　B　集団
ウ　A　男女　　B　年齢
エ　A　年齢　　B　男女

問六（ ④ ）に入る慣用句を次から選び、記号で答えなさい。

ア　脛（すね）をかじる　　イ　鵜（う）呑みにする　　ウ　大風呂敷（おおぶろしき）を広げる　　エ　肩で風を切る

問七　〜〜線部「科学的であろうとすると、導き出せる結論も地味なことになりがちで」あるとはどういうことですか。文章中の四本さんの研究の例を使って、一〇〇字程度で説明しなさい。

（おわり）

二〇二二年度
湘南白百合学園中学校入学試験

国語解答用紙

受験番号

氏　名

得　点
※

※には何も書かないこと

一

①	
②	
③	
④	
⑤	
⑥	まれ
⑦	
⑧	い
⑨	に
⑩	い

※

二

(1)
①
②

(2)
①
②

三

①
②
③
④

四

↓
↓
↓
↓

五

問一
A
B
C

問二

問三

問四

問五

15

問六

60

※

六

問一

問二

問三

問四
①
②

問五

問六

問七

100

※